いれかわり　たちかわり

紺とすん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いれかわり　たちかわり

【Ｎコード】
Ｎ６８７５Ｘ

【作者名】
紺とすん

【あらすじ】
枯淡な高校一年生、野々宮羽衣子の身に、ある日思ってもみないできごとが降りかかった・・・。くせもの兄弟や友人を巻き込んだ、しょうもなくて情けなくも、そこはかとなく楽しいような日々の記録。
《現在更新停止、改稿中。申し訳ありませんが、再開の際には、またぜひよろしくお願いいたします》

月曜日（1）枯淡なわたしの極端なできごと（前書き）

連載を始めました。
よろしくお願いします。。。

月曜日（1）枯淡なわたしの極端なできごと

はぁ～っ、と本日何度目かのため息をついた。
ため息をつくと幸せが逃げるというけれど、ため息を吸い込めば幸せを取り込むことができるのか。金魚みたいにぱくぱくすーすー息を吸い込んでみて、われながらむなしくなってため息をまた一つ。

現在わたしは、くだいて乾燥させたツバメの巣的なナニか、のようなモノがちらばっているカーペットを避け、勉強机のイスに体育ずわりしてじっと足先を見ている。あ、爪のびてるしきらなきゃ。でも爪きりってどこにあるんだろ。

それにしたってこんな大きな足、ほんとに勘弁してほしい・・・と嘆いているそばから、非常に現実的な匂いがわたしの鼻孔をくすぐる。かほりの原因はまちがいなく、この立派な足だと思われるが、認めるのが辛い。

はぁ～っ。脚にまわした腕はすらりと伸びていて、それに続く少し骨ばった手の甲や指もけっこうきれいだと思う。その上、脚だって短くないし身長は１８０近くあるんじゃないかな。だから、この体は高校生男子としては恵まれてるんだと思うけど、どうにもこうにも違和感が抜けないし、物哀しい気分にさえなってくる。

世界というものは一見のほほんとした顔をしつつ、ある日、とんでもない爆弾を無作為に落とすのだ。それを知らなかったわけではないけれど、自分の身にそれが降りかかってみれば、なぜ、どうして、なんのために、それが自分に起こらなければならないのかと思ってしまう。

いわゆる「おれがあいつであいつがおれで」事件（または「ドン☆キホーテ」事件ともいう）がこの身にふりかかったのは、数時間前のこと。それ以来、わたし、野々宮羽衣子（海崎高校一年、性別：女）は、外面的には原口准多（同校一年、性別：男）となったのだった。

別に自慢にもならないことはわかっているけれど、わたしはあのときまで、比較的平穏な高校生活を送っていた。まわりにさほど大きな迷惑をかけることもなく、まわりからそれほど大きな注目を集めることもなく。それが自分にとっての当たり前だったことにも気づいてなかったんだ、としみじみ思う。

わたしの通う海崎高校は、この近辺ではまずますの進学校。わたしは要領のいい方ではないからそれなりに頑張ってだが、成績はなんとか上位２０％以内のところにいた。あまり得意といえないスポーツは、運動神経の方は補正がきかないので、持久力でなんとかしのいでいる。

友達関係は、中学時代まではちょっとぎこちなかった、というか正直いって思い出が真っ白だ。でも嬉しいことに高校入学後、気の合う友達と出会うことができた。同じクラスになった美加里こと、田村美加里さん。

たとえば、駅の階段で靴がかたっぽ脱げてものっ凄い汗っかきのサラリーマンが拾ってくれたとけどその靴がちょっと湿ってた、とか、なんでもないような話ができる相手がいることの幸せ。

美加里のサバサバした性格のおかげもあって、べったりくっつくこともなく、でも何かのときは自然といっしょにいる。美加里以外の同級生とは親しく話し込むような仲にまでいたっていないが、必要があればもちろん普通に話すし、実際、感じのいい人が多いと思

う。

美加里いわく、わたしはやや周波数がずれている、ことがあるらしく、そんなときはさらりと意見をいってくれる。逆にわたしにしても、彼女に何かトラブルがあったりすれば、できることなら力になりたいと思う。初めてできたといってよいくらいの、程よい距離感で隣りにいられる一番の友達、と少なくともわたしの方は思っている。

登校して、授業を受けて、美加里と話して、授業が終わると学校を出る。美加里はバドミントン部に所属しているが、わたしは帰宅部だ。図書室かビーズのパーツショップなんかによることもあるけど、午後6時には帰宅。洗濯物関係とスープ類の用意はわたしの役割。お風呂や夕食が済むと、残りの時間は、兄と少し話をすることもあるが、基本的に自分の部屋に引っ込んで過ごす。きまじめに課題や予習をこなして、その後は、本を読んだり、唯一の趣味であるビーズワークに没頭したり。

ビーズワークは高校入学と同時くらいに始めた。だいたいわたしが何か始めるのは、世間でそれが流行り終わったころであることが多いらしい。でもそれはあまり気にならない。

完成したビーズの作品は、結構な数になって引き出しに収まっている。

アボカドやいちじく、カブトガニやコウモリみたいに、見れば何の形かわかるようなチャームもあれば、わたしが「付箋」と呼んでいる、付箋サイズのただの長方形もいくつもある。

自分が使うわけでも、誰かにあげるわけでもない、たくさんの作品は、何も考えずにひたすら指先に集中した時間が形を変えたもの。

こんな生活は、高校生女子としては、かなり地味と言えるだろう。思い返してみて、一瞬「箸にも棒にもかからない」だの「枯淡」だ

のといった語彙が頭をよぎったが、それはぜいたくな話というものだ。少なくとも、わたしはきちんと、わたしの体の中にいたのだ。

部屋のあかりもつけずにあれこれ考えていたために、気がついた時にはだいぶ暗くなっていた。

「うぉい准多ちゃん、風呂あいたよ。ところでお・に・い・さ・ん・が洗い方とかいろいろ親切に教えてあげようか、おまえにとって目新しい部位の？」

こんなダミ声とともにドアを開けたのは、一つ上の学年の「兄」。弟を少しクマっぽくさせた感じのこの人は、この体の兄であって、わたし野々宮羽衣子の兄とは別人、性格も全く違う。

現在わたしは、やむにやまれず原口家から通学することになっていて、「おれがあいつで（以下略）」事件、つまり原口准多との入れ替わり事件について知っているのは当事者二名に加えて双方の兄たち、そしてわたしの友人である美加里の五人だけ。

まあこのお兄さんも人はよさそうなのだが、原口家ではこの素敵なお部屋をこの人と二人で使うことになっていて、しっぽりと現状と対策について考え込むことは難しそうだ。しかも悪いことに、考えたところでどうにかなる話ではない。

そもそものことの起こりは本日週明けの月曜日、学校からの帰り道でのことだった。

月曜日（2）何がどうなってこうなった

最寄駅で電車を降りたわたしは、いつものように自宅を目指してゆるい上り坂を歩き始めた。もうあと一週間ほどで十月。ついこの間までアスファルトがとろけそうだったのに、今では地面が日陰に覆われて、夏の間にたまった熱はどこかへいってしまった。途中から人気のない脇道に入ると、ひんやり肌寒いくらいになって、右手にひっそりとした地蔵堂が見えてくる。

こんもりした植え込みにオレンジ色の小さな花は見えないけれど、かすかにキンモクセイが香っていた。わたしはなんとはなしにこの場所が好きで、今日はお昼に食べ残した早生のみかんを小さなお地蔵さんにお供えした。残りものだったけど、ほの暗い祠に置いたみかんのくっきりした黄色は、小さな灯りみたいに映えていた。

まさかとは思うが、残り物が悪かったということはないだろう。そのとき突然、坂の上の方から「おいっ、どけどけっ、どけよそこっ！」のように声が叫んで、一台の自転車が真っすぐにわたし目がけてつっこんできた。ここでうまくよけるほどわたしの反射神経はよろしくない。

自転車にまたがった同級生、原口准多の必死の形相が見えて、スローモーションのように確かに目が合ったというところで記憶がいったんぷっつりと落ちる。次に気がついたときにはこの通り、いかんともしがたい状況、になっていたのでしたよ。

呆然の度合いを測るものがあるならば、それは准多の方が高かったものと思われる。どういうわけかわたしは、かの有名な「おれがあいつで（以下略）」事件が今この身に起こったとその時点で確信していたから。

目の前には、高校の制服を着て倒れこんでいる見慣れたわたしの姿。ソレを見ているこちらは、中身だけわたしで体は男子高校生。地面に足を投げ出して座っているような状態だが、目線がいつもより高く、足先にひっかっている見慣れない汚れたスニーカーのサイズは推定２８ｃｍだ。

当たり前だが状況をまったく把握できないらしい、目の前にいる女子高生の姿をした「わたし」の白い靴下が妙にまぶしく見えた。

自転車は茂みに逆さに突っ込んで、進むこともできないのに車輪だけジージーまわってる。倒れたはずみにめくれあがったらしい目の前の「わたし」の制服のスカートをなおしつつ、わたしはなんとか渾身のひとことを口にした。

「さて、どうしよっか？」

自分の喉から出た低い声にはやはり、ぎょっとする。スカートをはいた方の「わたし」は、その問いには答えようとさえせず、

「ドッケルペンガー？」

なんて細い声で言いながら喉のあたりを触っている。残念ながら、それを言うならドッペルゲンガー、と突っ込む気力もありはしない。

不思議なことに、体は二人ともかすり傷程度で無事なようだった、入れ替わったことを除いては。

先ほど自転車でつっこんできた人、つまりわたしと入れ替わったらしい准多の家も、わたしの家も、ここから徒歩5分程度の距離にある。小学生の時には同じ学区だったので、准多とは同じクラスになったこともあった。

入学した高校の同じクラスにこの顔とこの名前を見つけたときは、あれ、と思ったけれど、中学時代は特に接点もなかったし、幼馴染というほどの濃い関係もまったく、ない。同じクラスになった今でも、あいさつ程度の会話しかしないくらいの間柄だ。それが、なぜ、

どうして、この人と自分が入れ替わってしまったのか。

そして当面の問題として、今の状況をわたしからこの呆けてる人に説明しなきゃならないんでしょうか。

わたしは目の前に転がっていた自分のかばんを探り、ケータイを取り出した。こういうときに頼ってしまうからダメなんだよね、と思いつつ、兄の理人にメールする。もちろん一番面倒な状況説明はふせたまま、現在地と自転車とぶつかったことだけ知らせた。

返信はすぐにかえってきたが、こちらに向かうという内容の短い文面から放たれる隠しようのない不機嫌さが、マイナス１０度の冷気のようにわたしを襲う。

周囲に重度のシスコンと噂されるこの兄に、わたしは頭があがらない。いや、頭があがる人の方が少ない気もするから、そんなに悲観しなくてもよいのだろう。それでもあの白く整った顔立ちを思い出しつつ、げんなりせずにいれらない。二人無言のまましばらくすると、制服の腰のポケットに手を突っ込んだ兄が歩いてきて、急にまわりの気温が下がった気がする。

あちらの方向から手ぶらの制服姿で歩いてきたということは、ちょっと前に家に着いたところを折り返してきたのだろう。

もうすぐ見納め、夏服の白シャツがよくお似合いです。しかしいかんせん、もうちょっとだけ、やさしげな表情をうかべることはできないものか。

地蔵堂のみかんをちらっとみやると、

「高校生女子が供え物するってどうなんだよ」

とかつぶやいている。なにゆえバレたのか。いや、悪いことをした

わけではないはずだけど。
「で、何この状況？」
呆けた表情で固まっている、見た目は妹で中身は原口准多、をさらりと無視して、見た目は原口准多、中身はこの兄の妹であるところのわたしに尋問を始める。わたしはつっかえつっかえ、実際に起こったできごとと、起こってしまったと推測される突拍子もない出来事について話した。

月曜日（3）兄が来たりて

もともと一を聞いて二十を知る、と言われる兄のこと、わたしの拙い説明の内容を理解したようだ。だからといって信じるかどうかはまったく別の話。むしろあっさり信じたりするのは怪しい人なのでは。しかしここは、なんとか信じてもらって状況を打破しなければならない。

眉間に縦じわをきざんだまま黙っている兄の視線を避けるようにうつむいて、見た目は原口准多のわたしは、妹であるわたし以外は知らないであろうと思われる兄の一面を口にする。

「机の引き出しの一番上、白いミニのワンピースからアヒルさんのぱんつをのぞかせて微笑む４歳のわたし」

何を隠そう、これは兄がときどきひっそり見ているらしいわたしの写真だ。裏には「羽衣子４歳、初めて似顔絵を描いてプレゼントしてくれた日」と書いてある。この引き出しはいつもは鍵がかかっているのだが、兄の不在時にたまたま開いていたのに気がつき、つい好奇心から覗いてしまったのだ。そしてとてもとても後悔した。

ちなみに「はじめて」シリーズのわたしの写真は、このあひるぱんつの他に数枚あった。しかし気温が一気に下がったように思える今の状況の中で、これ以上の言及は危険であるとわたしの危機察知センサーが告げている。

眉間の縦じわをより深めつつ、兄はケータイを取り出してどこかに電話しだした。

「亮太？　おまえのバカ弟が自転車で追突。いやとりあえず、怪我はたいしたことないから騒がないで出てきて。地蔵堂」

弟というからには准多の兄に連絡したのだろう。そういえば、准

多の兄は、この眉間に縦じわ眉目秀麗のわたしの兄と同じ学年であったはず。わたしと違って中学時代も交流があったんじゃなかったかな。

永遠とも思える長い氷河期の後、実際には十分もたっていなかったと思われるが、騒がしい雰囲気が近づいてきて、クマっぽい男が駆けよってきた。この制服にこの校章ということは、どうやらこの人も同じ高校らしい。

「だだだ大丈夫か？　ごめんなごめんな、ほんとにアホな弟で」

クマオ（仮名）は、その当のアホな弟にむかって（見た目は可憐な女子高生のわたしだが）、必死であやまっている。わたしがまあまあととりなすわけにもいかずに放置していると、准多が「おい兄貴～、なんだよどうなってんだよこれはっ！」と高い声でいってクマオの腕にすがっている。

クマオがギョッと顔をひきつらせ、兄がその二人をぺりっと引きはがす。

「おまえの妹、ショックでおかしくなっちゃったのか？」

クマオが聞くと、兄は低い声でこの荒唐無稽な状況について説明を始めた。

「・・・ふ～ん。そんなこともあるんだ」

って、素直に信じすぎでしょうっ！！

「いやまあ、理人がいうなら間違いないんだろ。ていうか准多、おまえある意味ラッキーじゃん！　人体ふしぎ発見的なあんなことやこんなことができ・・・んぶっ」

そのことばは兄の鉄拳によって遮られたが、なんだか今、とても嫌なことを聞いてしまった気がするのは何かの間違いであってほしい。

「とりあえず対策会議。駅前まで行ってカラオケボックスだな」

そのことばに異を唱える者がいるはずもなく、カラオケボックス

にて今後の対応が協議された。おもに兄のご提案に他の三人が賛同する形で。

その結果、とりあえず女子高生姿の准多は野々宮家、つまりわたしの家に、わたしは原口家に「帰宅」し、当面は絶対に他言無用、外見に中身を合わせる形でなりすまして様子をみる。家での生活は双方の兄がそれぞれフォローする。学校では情報交換のため、昼休みは無人になっている音楽準備室に四人集まって昼ご飯を食べる。と、いう決定がなされた。

ちなみに二人の持ち物も、外見の方に合わせて相手のものを持ち帰ることにした。ただしケータイだけは、うっかり誰かからの通話にでないよう厳重注意を受けたうえ、自分のを持つことになった。ケータイはもともとあまり使わない方だし、デザインもたまたま似たようなそっけないシルバー調のものなので、周りに違和感を持たれることはないだろう。

まだ間抜けづらをさらしている准多（といってもわたしの顔なのだけど）と、当面必要な、友達関係の情報なんかをポツポツやりとりしようとしてみた。准多は腐った魚の目をしたまま、それでもぼそぼそなんか言っている。

わたしは意外としっかりしてるつもりだったけど、なんだか考えが脳みそのうわっつらをすべっていく感じで、さすがに何も頭に入ってこない。ただ一つ、思いついたことがあって「はいっ」と控えめに手をあげた。

「明日になっても状況が変わらなければ、同じクラスの美加里にだけは、この状態を打ち明けたいんだけど」

わたしの友人関係をなぜか把握している兄は、当然美加里のことも知っていて、顎に手をあてて考え込んでいる。

「美加里に監視してもらわなかったら、この人には高校生女子の普通の学校生活、絶対ムリな気がする」

准多は、あくまでわたしの印象だけど、あんまり思慮深い方ではない。わたしの顔をした准多が教室で、机の上に足を投げ出して、女子にあるまじきことば遣いで男子生徒に話しかける場面がくっきりはっきり目に浮かぶ。

ほんとはわたしが直接ダメ出ししたいところだけど、今まで特に仲がいいわけでもなかっただけに、（周囲から見たら准多が羽衣子に）急にちょっかいを出すようになれば、クラスのみんなが妙だと思うだろう。

それに、美加里には今までいちいちプライベートを細かく報告するようなことはなかったのだけど、これだけ大きなことは、彼女に内緒にしておきたくないという気持ちが強かった。

「まあそうだな。どうせなら今ここに呼び出してみる？・・・おまえこのケータイで場所知らせろ、おまえだよバカ弟。男の声で呼び出すわけにいくか、このムッツリバカ」

「まあまあ、まだコイツ、自分の高い声にも納得してないわけだし」

涙目でスカートのひだをいじくる准多に見切りをつけて、兄が妹の一大事ということで美加里を呼び出した。

やがてやってきた美加里は、ショートにした髪とくっきりした顔立ちが引き立つ私服姿だった。そして、彼女はまあ、ある意味常識的な反応をした。完全に信じることはできないながら、四人に取り囲まれて、この嘘くさい話につきあうしかないということを納得してくれたのだった。昼休みも特に何もないときは、音楽準備室に来てくれるという。

ちょっとおもしろがっているような気配を感じないこともないけれど、ありがとう美加里。事件後はじめて心に温かい灯がともったよ、小さくだけど。

月曜日（4）お宅訪問はほめたおしが基本

それぞれの「自宅」に戻ることになって、いよいよ兄と准多のペアと別れるときに、わたしは兄に、准多に関するもっかの心配ごとを耳打ちした、流れるような早口で。

「野々宮の家で着替え、しないわけにいかないよね。いっそ、いいかな、着替えなくても？　いや、だめだよね、やっぱり。引き出しとか、おもに下着類の引き出しとか、入れ替わった人が開けずに替えを用意できるような方策をとっていただけると助かるんですが、いかがでしょうか。それから、・・・」

「それは当然。俺がふさわしいのを出してやるし。しばらく夜は同じ部屋で寝て見張っとく、やだけど」

さらりと言ってのけたけど、「ふさわしいの」ってどういう基準？

もちろんこんなことを頼みたくはなかった。けど他に姉妹もいないし、引き出しを兄が開けるか准多が開けるかの苦肉の二択だ。クマオが言った「あんなことやこんなこと」とかも、頭の中でぐるぐるして不安は倍増。でも、どうやらこんな心配も兄はお見通しのようなので、潔くお願いするしかないだろう。

とはいえ、このときには次の日目が覚めたら戻っているかも、なんて思ってみたりしたんだけれど・・・

クマオと一緒にマンション三階にある原口家に到着してドアを開けると、「にーちゃーん」と声がして、くりくりお目めの可愛い子がまろびでてきた。一人で留守番させてしまったらしい。

原口家の家族構成は道々だいたい教えてもらっていた。証券会社

勤務の父親、営業職の母親は帰りが遅いことが多く、今目の前にいる年の離れた妹、三波ちゃんは来年小学校入学予定で現在は保育園に通っているとのこと。
本日は帰りがけにクマオが保育園まで迎えに行き、家に着くか着かないかのところで、例の電話を受けたらしい。その三人プラス高校生兄弟二人の五人がこの一家の構成員である。

まず第一関門として、かわいい妹ちゃんに不審に思われないようにしないと。
「ごめんよ三波、今日はちょっといろいろあって、准にいちゃん疲れてるから、ちょっと部屋で休ませるな」
小さな妹を気遣うクマオはなかなかよいお兄さんぶりで、三波ちゃんもすなおにうなづいている。

風呂やトイレの間取りを小声で説明されつつ、兄弟の部屋にたどりついたが、ドアをあけたとたんに香ばしいかおりに出迎えられて今後の生活にかかる暗雲を見た。
これは天使のにこげの匂いだから、と自分に言い聞かせながら一歩踏み出すと、足の裏に感じるカーペットがジャリっと音を立てたのは気のせいに違いない。
「この部屋のものとか、適当に使っていいから遠慮すんなよ。あとこのへんの雑誌はもちろん俺のじゃなく准多のだけど、よかったら勝手きままに見てちょうだい」
と、肌色の割合多めの表紙を示してクマオは退室した。それはご親切にありがとう。
なんというかもう、異常事態の中でここまであっけらかんと対応されると、いっそすがすがしいです。
と、いうわけで冒頭の状態にもどる・・・

その後は人体の神秘にせまるのを極力慎重に避けつつ、初めてのトイレ、初めてのお風呂を恐る恐る済ませた。そのたびに、同じ経験をつんでいるはずの准多のことが気になる。お互いに人体探訪の旅に深入りする前に、どうかどうか、元の状態に戻れますように。

さて、残る本日の課題は、いまだ帰宅していない「両親」との対面だ。

現在午後八時、今日のように母親の帰りが遅めになるのは週の半分ぐらいで、そんな日は、子どもたち三人はできあいのものを買ったりして、適当に夕食を済ませるシステムなんだとか。ちなみに大人二人はどうするかというと、遅い日の食事は出先で済ませてくるという。

少しの驚きを感じながらも、リビングで三波ちゃんのにぎやかなおしゃべりに耳を傾けつつ、クマオが買ってきてくれたお弁当を半分ほど食べ、残りをクマオに食べてもらった。

それからソファでだらだらしていると、ピンポンピンポンとインターホンが連打された。

三波ちゃんがドアにとびついて開けている。

悪い人だったらどうするの、と止めるまもなく、明らかに酔っ払いの女の人がなだれこんできた。三波ちゃんが「ママ～」と呼ぶからには原口家母らしい。

「かっわいい、みっなみちゃ～ん、会いたかったよぉ～。キスミーぷりーず」

母、叫びながら三波ちゃんを抱きしめている。怪しい英単語を発しているが、顔や体型はこれ以上ないくらい日本人だ。続いてわたしの腕をガッとつかむと、けっこうな力で引き寄せてこれまた抱きしめる。

「へ～イ、ハンサムボーイズ、カマ～ンッ！　やっぱりぃ我が家が

ぁベストパートナーァ！」

わたしはふだん、家族でもハグなんてことしないし、だからなのかこういう積極的な身体接触はちょっと苦手で思わず固まってしまった。それをものともせず、こんどはクマオの方に抱きつこうとしているが、クマオは慣れた様子で水の入ったコップを差し出し、三波ちゃんは嬉しそうにそれを見ている。

「お～いしいウォーラー、あっなた～にセンキュウ！」

意味不明の迫力を見せつけて、彼女は嵐のように部屋に引き揚げていった。

そして約二時間後、原口家父が帰宅し、ほぼ同じような光景が繰り返される。

どうやら中身が入れ替わっていることがすぐにバレる心配はあまりしなくてよさそうだが、このテンションについていくのは大変かも、と思った第一夜だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6875x/

いれかわり　たちかわり

2011年11月16日17時02分発行